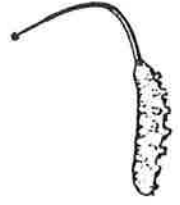


財団だより

多摩川

1982. 6. 第14号



汚れた水域にすむシマハナアブの一種



水遊びの季節(羽村堰下)

■多摩の地名■

⑥ 多摩の語源

次にタマ、玉川説をとりあげてみたい。タマ(玉)は美しいもの・すぐれているものをほめていう場合の言葉である。玉串とか玉垣とか使われている。多摩川も玉川と書かれることが多い。

有名な歌枕に「六玉川」がある。武蔵の玉川はその一つであり、特に調布の玉川として広く知られている。六玉川は山城(京都府)の井手の玉川、摂津(大阪府)の三島の玉川、近江(滋賀県)の野路の玉川、陸奥(宮城県)の野田の玉川、紀伊(和歌山県)の高野の玉川と武蔵の玉川である。

これらの玉川は、その流れが玉のように美しくきれいな川という意味の名前である。多摩川が中央の貴族に知られるようになり、都に近い玉川などとの連想から、歌枕などにもとり入れられて、いつか玉川と書かれるようになったのであろう。しかし奈良時代以前の多摩川の語源に、「玉のように美しい流れの玉川」を考えることはむりではあるまいか。

次に言語学者中島利一郎氏に「多摩」は、「滄り」(タ

マリ)からきたのではないかという説がある。武蔵野に住んだ古代人が、水の欠乏に悩んだが、多摩川の大川をみて狂喜して、「たまれる水」と讃嘆した。この「たまれる水」すなわち「滄り」(多麻里)の「り」が脱落して「タマ」となったのではないだろうか。国語のラ行音は増減自在の働きをもっている。例えばナメクジはナメクジラといいイオリ(庵)はイオともいうのである。「たまり川」は「タマ川」となり、やがて郡名に及んだのであろう(「多摩の語源」、『武蔵野の地名』所収新人物往来社刊)。

しかしこの説は、やや牽強附会の趣があるのではあるまいか。もともと古代人は水をもとめて水辺に住みついてはたはずであるし、「たまり水」と川のように「流れる水」の表現はちがっていたのであろう。

(次回続く)

(多摩の地名・保坂芳春・1979・武蔵郷土史刊行会)

多摩川散歩

●大師橋から多摩川河口まで



多摩川の自然を守る会 横山 理子

多摩川の最下流部にある大師橋から河口までの右岸は、かつてはウラギクの群生地としてその名も高かったが、現在は兩岸の護岸が進み潮の流れが変わったためか、その数は極めて少ない。大師橋と並んで架かっている首都高速羽横線橋の下流500m程にわたって群生している葦原も丸ハゲの様に刈りとられ、ご他聞にもれずグラウンドに造成されて、見る人をがっかりさせている。

しかし五月の大潮の引き潮時に河口にある葦原へ一歩足を踏み入れると、地面に沢山の穴があいていて、その穴から時々アシハラガニやクロペンケイガニが顔を覗かせては、慌てて引込んだり葦の茂みに逃げ込んでいく姿がたまらなく可愛い。カニ穴を覗き覗き行くその足許には、汽水性のウシオツメクサやシオクグなどが目につく。葦原の中からはオオヨシキリの囀さえずりが聞えてくる。

葦原が切れると、多摩川の水は一すじの糸のように細くなり、川底は広大な泥浜となって露出している。そこにも無数の小さな穴があいている。カニのすみかなのだが、近づくと中にもぐって姿を見せない。周囲が静かになるとこのチゴガニはいっせいに活動を始める。プロミナーで遠望した私は無数の小さなカニがピョンピョコ、ピョンピョコとリズムに合わせて跳び上っている姿に驚嘆し

た。それはまるで大粒の夕立が激しく地面を叩いて、しぶきが飛散しているようにも見えるし、カニの大オーケストラともダンスともとれる光景である。水色にすきとおる頭と白い小さな二つの鍬が、広い泥浜いっばいに広がって出たり引込んだりしている。この大発見に驚喜した私は、しばらくプロミナーに釘づけにされてしまった。このような光景が延々と続いている。

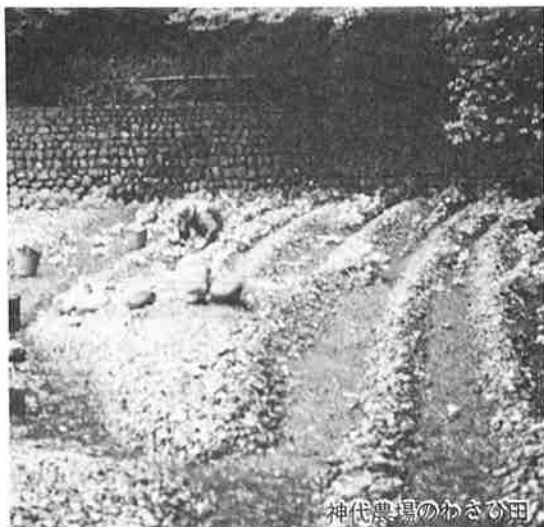
満潮のときの岸辺は潮が残していったゴミの絨毯と悪臭がただよっているが、少し離れた干潟には、ゴカイやカニの喰べ出した砂が美しい多彩な模様を画いている。遠くなった水辺には、夏羽のハマシギ、ダイシャクシギ、キョウジョシギなどシギシギの仲間も多く、北に帰る殿と思われるユリカモメやスズガモ、そして南から来たサキガケ魁のアジサシ、コアジサシが仲良く交歓している姿も楽しい。

さらに下った堤防ぎわに、多摩川唯一のハマヒルガオが可憐な花をつけていた。今年は去年より勢いが良く花の数も多かった。

「人間いたるところに青山あり」という言葉があるが、「多摩川いたるところ自然あり」といいたい程河口は春夏秋冬の顔がある。

川の上流の浄化がされたならば、きっとこの河口もまた新しい顔を見せてくれることであろう。滅びゆくものへの哀感と、生きるためのいじらしきまでの努力が身にしみる河口でもある。

私と多摩川



日本大学文理学部教授 沢田 清

泉，川，海……とかく水のあるところは，美しい。そして心をいやしてくれる。あるユグヤ人なる人の話によると，この世で最も尊いものは，水と自由であると。その2つとも日本が世界で最も恵まれているのは有難いことである。高度経済成長のあおりをうけて，生活環境が破壊されようとした時，自然を守ろうとの警告が，忘れかけていた水の有難さを，あらためて認識し，それを守ろうとする動きのできたことは，何といっても喜ばしいことである。多摩川への情熱もこうして，多くの人から注がれるようになっていく。筆者も，それを痛感しているひとりである。

東京というと，緑のない「砂漠」の世界のように思われるが，多くの侵食谷があり，その崖端に泉がわき，池となり，やがて川となって流れているところが多い。そのようなところが，急激な都市化によって破壊されようとしている多摩川水系においても，緑地となって保全されているところが意外に多く，大切な自然財として残されていることに感激する。

神代植物園と深大寺は，東京に残された緑地の1つとして，多くの人に親しまれている。

「そば」を育てている泉は，やがて野川となって

多摩川に注ぐが，その1つの支谷が，都立農業高等学校の神代農場となって保存されている。そこを訪れたいと，前より思っていたが，やっとの思いで今年の4月28日果すことができた。その報告をここに記してみたい。

その小さな谷は，市立深大寺小学校の北隣りにある青渭神社を谷頭として，南東方に開いている。谷幅は50mぐらい，谷の高さは10m程，長さは200～300mぐらいの，まことに可愛い小さな谷であり，母方の多摩川からみれば，曾孫にもあたりうか。

この谷は，さきほど述べたように農場となっていて，一般に開放されていないのが残念であるが，それだけによく保護されており，緑の別天地である。谷頭部は竹のしげった暗い環境であり，足のふみ場もない「原生」地である。そこから，ちょっと下ったところに，泉が湧き，水温が14～16℃の清冽さを利用して，わさび田となっている。わさびといえば，遠く天城の山中か，信州を思い浮べるのであるが，東京にも，みごとに存在している。訪れた時は，石を洗い，わさびの苗を植えているところであったが，今年は異常の渇水期で水は少ないとのことであった。このわさび田でわさびを育て，水温が，やや上昇した下流は，鱒の養魚池となり，さらに，その下流は，蓮田，そして水稻の田へということであるが，水田としての谷が，水温に応じて，わさび→はす→いねと変化してゆくところ，まことに教科書どおりを現実にみせて，実に興味深い。

日本は，わずかの土地の高低や水温の違いによって，多種の土地利用がされてきたことが特色であるといわれる。自然への微妙な対応が，この小さな谷で実証されているのを見て感慨が深かった。

多摩川には多くの侵食谷があって，本流へ注いでいる。この小さな川，泉，池は，母方の多摩川と同じように大切な自然環境である。いつまでも守りつづけて，子孫に伝えることは，私たち世代の大きな責務の1つである。

甦れ！多摩川

小河内ダム上流の下水道計画

多摩川上流の奥多摩湖は、別名小河内貯水池と呼ばれる、世界でも有数の貯水量を持つ水道専用のダムである。このダムに流れ込む第一の支川は丹波川で、多摩川の本川でもある。ダムのはずれから、青梅街道をさらに7～8km奥へさかのぼっていくと、わずかばかりの河岸段丘や狭い斜面に住宅が密集している一帯がある。山梨県北都留郡丹波山村丹波、奥秋といった所である。このあたりは、首都圏の中でも最も深い奥座敷で山岳の観光レクリエーション地帯となっている。年々、観光客も増え昭和55年度には、年間75万人もの人が利用している。東京都の広大な水源涵養林に囲まれ、清流での釣りやキャンプ、登山など都心の雑踏からのがれるには絶好の地であろう。ところが最近、この観光客の増加にともなって、生活污水が少しづつ川の水質を悪くしはじめ、ダムに影響をもたらした。

「水の華」と呼ばれる現象がある。これは、水中のプランクトン（特に渦弁毛藻類）が大量発生して水中にしょう油を流し込んだような模様をつくる事から呼ばれるもので、ひどくなると水にくさみをつけたり、口過効率を悪くするやっかいなものである。人造湖や閉鎖的な水域に多くみられ、霞ヶ浦はその問題で死んだ湖とさえ呼ばれるようになった。これも、富栄養化した水（家庭排水・産業排水など）が流入する事によって発生する。小河内ダムでも、ここ数年この現象が増加している。昭和54年171件、55年217件が報告例である。

小菅川は、ここ数年、有機リン洗剤によるリン濃度や養魚場の飼料による有機物の流入が増加し、年間、T-Pで0.05ppmを記録したこともある。ダムの場合、およそ0.02ppmが限界とされているから、このまま放置しておくことはできない。そこで、東京都と山梨県及び、小菅村・丹波山村が協

議し、下水道計画を進める事となり、昭和57年度から国庫補助事業としてスタートする事になった。事業費は20～30億円の予定とし、処理能力2400 m^3 /日、能力としては、通常の下水処理の約3倍の容量を持たせ、オキシデーションリッチと呼ばれる活性汚泥法で処理する計画である。放流水質はリン濃度で0.5ppm、ダムの水質0.015ppm以下が目標値とされている。但し、この下水道は計14ヶ所ある養魚場からの排水は計画されておらず、今後の課題として残されている。東京都と二村の協定には、村はこの養魚場対策に必要な処置を講じているが具体策はない。

小河内ダムの滞泥量は、完成後20年以上たった現在でも1%にみたないとされている。これは、日本の他のダムに較べると極めて良好な状態を示しており、水源林の保全がダムにとって非常に重要な事を示している。だから、生活排水によるダム水質の汚染は早急に手を打つ必要があるわけだ。

しかし、この事業は昭和57年からスタートする事になっているが、初年度予算は約700万円程度しかついていない。国の予算の事情によるものであろうが、完成まで6～7年がかかると予想されているこの計画も、将来に対する不安はかくせない。なぜなら、やはり国庫の補助事業である多摩川の流域下水道がすでに10年も遅れている事からだ。国の予算に引きづられて、小河内が取り返しのつかないダムになったらという懸念は杞憂にすぎないのだろうか。ここでもまた受益者負担という問題を持ち出す事はナンセンスな議論であろうか。この下水道計画は、「特定環境保全公共下水道」と銘うたれている。これは、やはり特別な事であり急務な事業である。多摩川にこれ以上、第二の小河内ダムを造ることは不可能であろう。その意味でもダムの水質保全対策に猶予はない。

《 多摩川およびその流域の環境浄化に 》 《 関する調査・試験研究募集—第二次— 》

財団は昭和57年度の調査・試験研究を昨年12月発行の「財団だより・多摩川」等によって公募いたしました。応募多数のうち選考委員会により、学術研究（新規）6件、一般研究（新規）6件が選考・内定しております。

その結果、助成枠に若干の余裕を生じたので、追加第二次公募を学術研究、一般研究のそれぞれについて実施することにいたしました。

●学術研究者の方へ

昭和50年度から始めた助成研究も内定分を含め74件となりました。すでに助成研究者となられた方々の努力で、水文及び生態的分野からのアプローチした多摩川流域研究はかなりの成果を収め、財団編集の「助成集報」にとりまとめられ多くの方々から評価をいただいております。しかし、多摩川に関する基礎研究はより多くの分野からさまざまな形でアプローチを重ねる必要があります。財団はそうしたアプローチが多摩川のみならず多くの都市河川の環境浄化に資するものと考えております。例えば流域の土地利用の研究等社会学的視点からの研究は待たれる研究の一つです。また、浄化のための実験研究なども応募の対象になります。どうか奮って御応募下さい。

●一般研究者の方へ

昭和52年度より実施された「草の根」研究助成も内定分を含め36件になりました。小・中学校の先生と生徒の共同研究、河川環境教育マニュアルを作ろうとする先生、地域住民の方々のご参加も増えて来ました。

財団がこの助成事業を始めた意図は研究を面・線・点と分類した時、点の研究は地域に密着している学校の先生や地域住民の方々の中に、すばらしい研究をされる方がおられるのではないかと言うことでした。だからといって面・線の研究を期待しないと断言するわけではありません。

今まで研究に応募されて、同種、同一研究等のため、助成研究として不採用になった研究者の方もおられますが、再度、研究内容、規模等を検討され採用になった例はいくつもあります。

『調べ』、『試み』、『究め』を通じて、多摩川をみつめ、蘇生の道を探る中で、今、行なわなければならない研究には、財政の許す限り、助成をしていきたいと考えています。

公募締切日 昭和57年7月31日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号(地下鉄ビル内)

電話 (03) 400-9142

(財)とうきゅう環境浄化財団

●多摩川'82の発刊

<総集編>

今年のテーマは、「浅川はいま」ということで、八王子・日野市といった都市化の著しい地域を流れる浅川を取りあげました。急速に都市河川化する浅川はさまざまな問題を抱えています。浅川を単なる都市排水路にしてはならないと思うのは、多くの住民の願いでもあります。そこで、新しい街づくりの中で川をどう捉えておくべきか、いくつかの意見を取りあげてみました。浅川は日ごと変わっています。少しでも多くの方々に今の浅川

の姿を知っていただくために特集したものです。

<資料編>

資料編は、昨年に引きつづき、東京都による環境保全・水質汚濁防止対策を昭和48年から昭和56年までの分として整理収録しました。

この本をお望みの方は財団事務局までご連絡下さい。

<多摩川雑感>

5月23日の日曜日、多摩川の自然を守る会の人達や建設省、東京都の人達、それに一般参加の人達と多摩川を歩いた。この催しは、春3回、秋4回に分けて、青梅万年橋から羽田河口までを歩こうという呼びかけに参加したもので、晴天に恵まれ楽しい一日でした。その日は、永田橋から日野橋までのコースでほとんど河原を歩き、多摩川のさまざまな顔に出会ったような気がした。特に、川原に出ている人達が実にいろいろな遊び方や過

し方をしている事だった。気のはやい子供は裸になって泳いでいるし、昼寝、ピクニックと思ひ思ひの姿で、実に開放的だった。それにしても、川原に公園と称するものが多い事。こんな所になぜ公園が必要なのかと首をかしげざるを得ないものがけっこうあった。そして、そこで遊んでいる人がほとんどいないのもおもしろい現象だった。

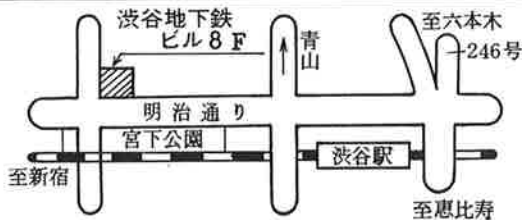
山道省三

<お詫びと訂正>

前号で、執筆していただきました「多摩川散歩」の原稿を編集部で一部変更し、筆者にご迷惑をおかけいたしました事をお詫びいたします。

又、甦れ！多摩川で、「散床口過方式」とあるのは「緩速口過方式」の方に訂正します。

- ・発行日 昭和57年6月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125